

夕林

黒田新

如何様にも生きていく時代に

こびりつく損得勘定

他人の膝の上で浅く息をするたびに

個の境界がゆるみ

零と一の信号が血管に入り込んで

身体の髄が削れていく

陸で漂流し

宛てもなく線路を転がっていく途中

地表に足を踏み入れ

土を固めた像を蹴り飛ばしても

机の上のキーボードの冷たさで

心拍数を下げていても

地球は一秒たりともこぼさず

知らぬ顔で瞬きを繰り返している

コンクリートの木々の足元

ほんの静かな酸素の中で

もう一度呼吸を覚え直す夕方

誰もいないことを確かめながら

思い出に酒をかけゆっくりと燃やし

その灰と陽を眺める

それだけが楽しくて

今は呪いたくなるほど何も足りない

夢の骨のかけらを

ただ握りしめている